

先進国ではない。アンゴラは沿岸資源豊富でフィッシュミール生産世界3~4位である。巾着網の15~30トン漁船でタイ類などを目的に底まで旋く。地曳ではタイ類がとれる。「赤物」多く魚はいるが流通、資本全くなく、伸び悩みである。南西アフリカ(旧ドイツ領)、南アケープタウン沖にかけてマイワシ、メルルーサ、ロブスターの漁場がある。北側のタイと南側のタイ(レンコに似た綺麗なタイ)は明らかに種類がちがう。ビグミー沖は動物の骨が多くて網が曳けない。モリタニア(スペイン領)サワラ沖をカリナー海流が南下しており、それに続いて、シエラレオン、リベリア、アイボリーコースト(アビジャン港)、ガーナ(ボアン・ノアル港40~50トン船)、ナイゼリア(人口3000万人、首都ラゴス)にわたり南東~東に向うギネア海流域で、5、6月~7、8月 イワシ類(*Sardinella aurita* = African herring という)が盛んにとれる。カヌーを機動化し、浮旋刺網で、2~3カ月間に2万4000トンも水揚している。闇夜に出漁し、満月には休漁するが。夜光虫で魚群の所在を見て網を引く。旋いたら水中へ飛びこんで魚をおいこむ。網に充分刺さると網を海岸へひつばつて来て浜へ曳き上げる。この辺の水温はかなり高い。西アフリカ諸国は未だ沿岸漁業で、川崎船程度のカヌーなどの地方的漁業である。ナイゼリアやカメルーンは畜産だけでは蛋白質不足で魚類蛋白質が必要だが、アンゴラや南ア連邦は水産物に依存しなくても牧畜で充分で牛肉を主に消費している。塩乾魚、(タラ、ニベ、タイなど)缶詰ははいつており、冷凍魚の消費もある。赤道熱帯地帯(雨季9月頃)のマラリア地帯では大へん蛋白質に不足している。ソ連は Cap Blanco 方面に大船団で操業しており、親ソの社会主義国ガーナ、ナイゼリアの方にも出漁しておる。ガーナには1トン45ポンド=4.5万円位で入れており、ナイゼリアではそれより安価である。南阿沖母船底曳トロールは座礁するほど近岸も操業するが、メルルーサは700~800m深の深みを曳く。56月は天候が不良で特に Benguela 以南はよくシケる。港湾ラスパルマスには長い防波堤が造られており、ケープタウンにも強い西風を防ぐりつばな防波堤ができています。英国領は先づ良い港を造つており、港湾設備を見るとその国がわかる。ラゴス(Lagoonにある。浅沼地を切り開いて造つた港)、ガーナのテーマは完全な人工港であり、砂地の内に海岸線を切り開いて造つた港である。

## 5 総合討論

真田会長：底魚漁場資源の解明が必要である。自分も大正末年以来トロール船に乗っていたが最初は資源としての関心もなくやつていた。戦後1000トントロール船を造つてカレイ漁をやる計画を立てて行なつたが、一週間北洋で何処でもとれなかつた。カンで北洋へ行つたら何処でも獲れると云う感じをもつていたが、底魚資源は予想外であつた。それでアフリカ底魚漁場でも最初反対したのは以前の経験からであつた。それがこんなに大きい漁業になつた。現在状況では仲々本当の正確な資料を集めるのはむづかしいものがある。カツオ、マグロとトロールも含めた海洋漁業全体の資源問題が狙上りする日も遠くない。

戦後西豪州沖のトロール漁場へも行つた。アフリカトロールも日水ではギリシアあたりから出

かけていた。

新野弘（東水大）：海底鉱物資源も高価な南阿のダイヤ、チタンもある。南米黒砂、燐灰石、北米の砂金などもある。

花岡資（水産庁調研部長）：これまで水研では大西洋トロールはほとんど全くやっていない。海外トロール研究体制が必要である。このような会合に今後も研究者も出さしてもらい知識を吸収したい。

松本（水産庁海洋2課）：水産庁11月海外トロール許可で相当勢力増える。カツオマグロ同様広汎な活動で、事務局も対応できるよう希望する。ラスバルマス日本領事館に水産官をおく。今後の座談会やるとすればもつとテーマをしぼり、意見を出し合う有効な会をもちたい。

中村（海外トロール協会専務）：日本の国際漁業も問題が多くある。意見は水産庁に出していい。これから色々問題が出てくる時である。

萩原（大日本水産会）：貴重な話に感銘、今後もこの会を度々開催されたい。

押手敬（北海道学芸大）：海洋地質を専攻しており、1960年ベーリング海底曳漁場で調査した。底質を通して底魚漁場が判定できる。

清水（大洋漁業トロール部）：北西大西洋に1隻試漁、ICNAF会議（1964）出席して資源に対する各国の態度を知った。底魚資源実態を知るためにどうしたことを測定すればよいかを知りたい。アフリカのイカ、タコ、タイの資源は将来どうなるかを最も知りたい。具体的にどのような調査をやればよいか？ イカ、タコ標識放流やるのに又、年令査定はどうしたらよいか？ 漁業者も研究者に協力してやりたい。欧州、米国の連中は色々やっている。標識タラが間々揚ると条約加盟国に緊急即座に報告するようになっていく。資源究明のために今すぐ打つ手はないか？ 年令査定等で、資源の実態を知り、見込みがないなら早く移らねばならない。標識放流、魚体調査、年令査定などは是非やらねばならない。

渡辺（以西底曳協会、海トロ協会）：海外トロール漁場にほう大な資料が要る。

足立（北洋水産）：消費者関係の問題をどうやつてとり上げて行くか？

矢部博（水産庁）：遠洋トロールの可能な2000～2600トン級スタートロール調査船1隻を11億円もかけて建造、42年5月出来上ると新漁場開発調査ができる。どこをやるか、今青写真を練っている。

斎藤泰一（東水大）：現場経験の豊かな人、自分たちでそれぞれ何か知りたくて困っている人など研究者を攻め立てて具体的問題の解決をはかる会合を希望する。

岡田立三郎（水産庁海洋2課）：問題を大いに煮つめて小委員会も必要であろう。たとえば年令査定、回遊、水理、潮流、底質、トロール等。 （文責 宇田道隆）

附記1. 同年9月25日「速トロゼミ」（水産経済調査会主催）が上野相互銀行6階に開かれたのに出席、上述の座談会要旨を補足するためメモを摘記する。

松本班長（水産庁）に続いて、次のスピーカーは

和田（日魯）：ラスバルマスを中心に北西阿20°～25° 300浬沖までの岩礁の多い海

底の瀬の縁辺を曳網する（1日3回2時間半位）。外国船がたくさん来ておる。300トン型1,000馬力。500トン型になると船良くなるが魚艙アンバランスで、1,500トン型漁船とほとんど差はない。

田村（日水）：大型船以西サイドトロール、欧州スターントロール。2,500トン型トロールが最適と思われる。南の漁場の南阿連邦アンゴラ沖 北西沖650～750m深ぐらいが主漁場でメルルーサ（ヘイク＝底ダラの類）が量的に多い。キレンコ（サクラダイの代用品の鯛）もとる。北方300～500m深でも漁れている。アジ・サバはかなり量的にとれるが、低価で採算困難。メルルーサは外国向きだが比較的値が安く、輸出に悩んでいる。キレンコは100～130m深で多く漁る。日水、大洋両社船出漁しているが、日水は昭和37年暮から西アフリカに出漁している。最初は魚体大き過ぎて売り物にならぬとされていた。それがキレンコが最近急に小形になり、とれなくなつて来た。輸出販路も伸び悩みである。キレンコは底の荒い所に多く、網の障害が多い。北方のイカ・タコにくらべて値段はそれほど下らない。アンゴラ沿海ではニベがとれたが今はあまりとれない。ガーナ、ナイゼリアでも試験操業やつたが余り思わしくない。

2,500トン型ならメルルーサ、キレンコなど船腹に1,500トン位積める。漁場は魚種によつてはつきり分れている。メルルーサ、キレンコと併せて好漁時は30トン積める（平均1隻で20トン余り）。メルルーサは頭をとつてドレスして容器につめ、1日25トンで45日で満船に達する。キレンコは1日30トンのこともあるが1日10トン前後で続き、ムラが目立つ。平均1日15トンとして80日で満船に達する。イカ・タコの好い時季ラスパルマス方面でやり、あとはケープタウンの方でとはいかない。アフリカ北部から南の端までは5,000哩もあつて、走つても日数がかかる。北は北、南は南で専属漁船を向けるとよい。ドレスは歩留まり6割～6割5分。ファイレーは、タラ向きにファイレーマシンができてはいるが、メルルーサ向きのが最近できた。しかし硬い胸骨のふくらみでファイレーに困難しているようで、多少やつているが軌道にのっていない。イカ・タコは1年近くで成熟するとされていて、先づ1年生である。量的には差はないが、魚体の大きいのが最近減つて来ておる。大きいイカは1年位ではあんなに大きくならぬだろう。

広瀬（宝幸）：314トン型船型は小さ過ぎる。最も操業し易い船は、下関水産大学校練習船耕洋丸の型で、船尾から操業中波うちこむのがカバーされ、荒天でも支障ない。

和田（日魯）：採算率は、300トン型船で5トン/日とれればよい。500トン型船は6～7トン/日、1,000トン型船は10～11トン/日とれればよいと思う。

オ1表 アフリカ漁場の漁獲量

	総量	サクラダイ	キンマダイ	タイ類 小計	モンゴイカ	タコ	許可隻数
昭和34年	トン 802			トン 748	トン 10		2
35	6,380			4,325	851		8
36	27,952			12,037	12,485		15
37	49,133			25,243	11,381	トン 4,121	27
38	92,084	トン 14,157	トン 16,186	39,205	18,036	6,999	34
39	122,406	14,043	21,501	45,361	18,303	8,658	46
	マダイ	ニシキダイ	アジ	ホウボウ	タラ	ヤリイカ	曳網回数
昭和34							831
35							4,533
36							16,370
37							28,479
38	トン 3,377	トン 588	トン 6,504	トン 266	トン 6,631	トン 2,262	48,938
39	2,362	410	14,065	414	14,719	3,518	68,667